ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　そして、冒頭の場面に戻る。

　この旅に何故、保護者代わりの大人がいないのか？　その答えはつまり、パーティに招待されたのがこの五人だけだった、からである。

「あれだね。いつかの合宿を思い出すね」

　拓馬が、近づいてくる白いフェリーを見ながら呟くのを聞いて、雅也もそう思う。最も、あの時はフェリーでは無くクルーザーだったのだが、そんな違いは瑣末なものだ。

　フェリーは五人の目の前で止まり、中から出てきたのは、

「久しぶりだね、良助君、拓馬君、雅也君。太一君、神楽君は初めまして、かな？」

先日の九条さんである。握手を求めてきたので、一応『会うのが二回目』である三人はそれに応じた。

そして『初対面』の二人は、どこか薄らとではあるが、警戒の色を潜めつつも、それでも取り敢えず九条さんの手を握る。二人の警戒に気づいているのか否かは知らないが、九条さんは少しだけ目を細めた。

「外は暑いだろう？　フェリーの中は冷房が効いているし、荷物はこっちで預かるから、入ろうか」

　そう言って、五人の荷物を……恐らく九条さんの相棒らしきストライクをボールから出して手伝わせつつも運び始めた。

　こうなってしまっては、取り敢えず入る他無い。と言うより、拓馬はもう行ってしまっていた。どこか浮き足立っているように見えるのは、きっと気のせいでは無いだろう。

　他の四人は、フェリーに入るのに少しだけ躊躇していた。このパーティがどこか怪しい、と思っているのは勿論なのだが……

　雅也達四人は、ちらっとストライクを見る。

　そう、ストライクだ。分類は『かまきりポケモン』で、あの田島辰巳の相棒のハッサムの進化前である。進化前と聞くと弱そうに聞こえるかもしれないが、ハッサムが鋼・虫タイプなのに対し、ストライクのタイプは虫・飛行タイプ。ここだけ見れば弱点タイプが炎しかないハッサムが強く思える。

　だが、タイプ一致で特性の『テクニシャン』による『燕返し』の一撃。加えてハッサムを上回るそのスピードを考えると、ストライクも侮れないポケモンの一匹と考えていいだろう。さらに、ストライクの腕の、鋭い鎌。そう、この鎌だ。見た感じ、かなり切れ味が良さそうである。

　つまりである。

　四人の目下の心配事は、自分達の荷物が、ついうっかりあの鎌でバッサリいってしまいやしないだろうか、ということなのだ。と言うより、腕が鎌のあのストライクに、ちゃんと荷物が運べるのだろうか、という疑問から、四人はストライクから目が離せなかった。

　現に、ストライクは荷物一つ持つのに四苦八苦していて、見ていて危なっかしい。

　九条さんも、選出ミスに気がついたのか、「あっ……」っというような顔をした。だが、他にポケモンを持っていないのか、苦笑しながらストライクに「ゆっくりでいいよ」と言うだけで、ボールには戻さない。

　結局、荷物のほとんどを九条さんが運んでしまった。まあ、一個運べただけでもよく頑張った方だろう。

　船内に入った四人は、拓馬の姿を探す。

　簡単に見つかるかと思いきや、これが中々見つからず、ルカリオの『波導探知』に頼ろうかと本気で思ったほどだ。だが、

「あっ、いた」

　ガラス戸越しにではあるが、ついに拓馬の姿を確認すること出来た。

　フェリーの中はさほど広くないと思いきや、どうやら下の方に休憩室のようなものが備わっていたらしい。神楽が階段を見つけてくれたおかげで、ルカリオに手間をかけさせずにすんで良かったと四人は思った。

　とは言え、中に入るには少し勇気がいる。拓馬の他に三人、先客がいたのだ。

　これだけなら四人は普通に休憩室に入ったのだが、その三人が拓馬と一緒に談笑しているとなれば話は別だった。何やら得体の知れない空気を感じ、その不気味さもとい異様さに、四人の足は中に入ることを拒んでいたのである。

「あれ？　四人とも、どうしたの？」

　扉の手前で屯していると、後ろから九条さんの声が掛かる。言った後で、九条さんも中の様子に気がついたらしい。苦笑を浮かべると、四人を運転室のところまで連れてきてくれた。

「俺達の他に、乗っている人がいたんすね」

「うん。冥利の仕事仲間だよ」

「あー……映画関連のお仕事をされているんでしたっけ？」

　太一の言葉に、九条さんは頷く。聞けば、三人は俳優では無く演出だとか台本だとか、そこら辺のお仕事をなさっているんだとか。

「一番太っていて、頭にバンダナ巻いていた、メガネの人が橋本健太郎さん。衣装担当だったかな？」

　九条さんが、先程いた三人について説明し始める。そう言えば、何だか一昔前のオタクっぽい見た目の人がいたな、と三人は思い出した。

「で、反対にかなり痩せていて、髭の濃い、縁なしメガネをかけていた人が岩本勉さん。演出担当の方だね。

　それで最後に、結構ガッチリとした体付きの、グラサンをかけてニット帽を被っていた人がいたでしょ？　あの人が本間明さん。台本のチェックをされているんだったかな……？」

　最後の方は少し自信なさそうではあったが、見た目と名前が一致すれば、四人には充分である。仕事は何をしているだとかは、どうせ拓馬が聞いているだろう。

聞かなくても後で勝手にペラペラ喋りそうなのは想像に難くないので、四人はそろって苦笑いを浮かべるのだった。